

柿生産で企業力向上

福岡市の岩田産業 朝倉市で農家支援



11月下旬の収穫作業に当たった日野勇樹さん（右）、岩田産業の岩田章正社長（右から2人目）と社員たち

本業こなし、収穫まで

業務用食品・酒類卸の岩田産業（福岡市）が、朝倉市杷木志波で農家の協力を得て、地域特産の柿の生産に取り組んでいる。高齢化による耕作放棄地が増える中、食に関わる企業として農業を支える試みを今年1月から開始。11月下旬、作業に当たった同社の社員や家族らが収穫した。

市やJA筑前あさくら（同市）によると、柿部会に加入する農家は約350人で平均年齢は70代。7年前の九州豪雨で被災した山間部の道路が復旧途中な上に高齢化もあり、市内217分のうち斜面地などを中心に、人の手が入らなくなった柿畑が増えているという。

同社と取引のある同市杷木志波の柿農家日野輝彦さん（78）と勇樹さん（46）から実情を聞いた岩田章正社長（59）が、社員十数人を派遣し実体験させることにした。空いた時間に短時間の農作業アルバイトを紹介するアプリ「農How」の代理店でもある同社。岩田社長は「農業を実地に

体験した人材を育成することは、事業展開のためにも有益だ」とその理由を語る。

昨年の収穫を終えた柿の木の皮をほぐ、木づくりから開始。勇樹さんの指導を受けながら、肥料を与えたり、余分なつばみを落としたりする地道な作業に汗を流した。会社で本来業務をこなしながらだったが、「覚えも早いし、作業は正確。組織できっちり働いている人はどんな職場でも強いと感じた」と勇樹さん。

11月29、30日にあつた収穫作業には、社員やその家族25人が参加。たわわに実った柿3・5トを丁寧に摘み取った。JAによると、今年は温暖化による病害虫被害などもあって小ぶりが多く、平年の3割ほど少ない約2200トの収量を見込むものの、糖度は高くおいしいと太鼓判を押す。

岩田社長は来年以降も柿生産に関わっていく方針で、そこで得たノウハウを農業の担い手不足に悩む他の地域の課題解決にもつなげていきたい考えだ。「一企業の力は小さいが、国の食料自給率を維持するために、農業分野にチャレンジする価値はある」と話す。

（吉川文敬）